

履歴と業績



田 邊 裕

—履歴—

- 1959年 3月 東京大学教養学部教養学科卒業
1959年 9月 国際キリスト教大学社会科学科助手（非常勤、60年3月マデ）
1963年 4月 東京大学大学院数物系研究科地理学専攻 博士課程中退
1963年 5月 東京大学教養学部助手
1966年 3月 理学博士（東京大学）
1966年 8月 フランス共和国レンヌ大学留学（フランス政府招聘留学生、68年8月マデ）
1971年 4月 東京大学 助教授
1978年 1月 パリ第七大学客員教授（78年7月マデ）
1986年 4月 東京大学 教授
1991年 7月 パリ国際大学都市日本館 館長 に派遣（外務省文化交流部）
1993年 8月 東京大学 教授 に復帰
1994年 10月 同学教養学部人文科学科科長
1996年 4月 総合文化研究科教授（改組）
1996年 4月 同学大学院広域科学専攻広域システム系主任、教養学部広域科学科科長
1997年 3月 東京大学定年
1997年 4月 慶応義塾大学経済学部 教授
1997年 4月 帝京大学国際センター（副所長、非常勤、2008年マデ）
1997年 5月 東京大学名誉教授
1997年 12月 Palmes académiques 勲章（オフィシエ章）フランス政府
2002年 3月 慶応義塾大学定年
2002年 4月 帝京大学経済学部教授、経済学科長（2007年マデ）
2003年 4月 慶応義塾特選塾員
2004年 4月 経済学専攻主任（2007年マデ）、帝京大学経済学部長、大学院経済学研究科科長
2006年 4月 観光経営学科長（2007年マデ）
2007年 4月 同学日本語予備教育課程科長、国際交流委員長
2010年 3月 帝京大学定年

—大学外委員等—

- 1994年－ 日仏協会 評議員

1995年－2000 文部省高等教育局大学設置・学校法人審議会専門委員
 1995年－2003 文部省高等教育局高等専門学校教官選考委員
 1995年－ 外務省文化交流部 パリ大学都市日本館館長選考委員
 1997年－ 日仏会館 評議員
 1997年－2001 学術会議 地理学研究連絡委員会委員
 2001年－ 学術会議 特任連携会員、2009年より連携会員
 2002年－2005 大学評価・学位授与機構 大学評価委員会専門委員（総合科学分野主査）
 2005年－ 日本高等教育評価機構 評価員

(学会関係)

1981年－ 山川出版社 歴史と地理 編集委員
 1980年－1984 国際地理学連合 応用地理学研究部会 部会長
 1984年－1992 国際地理学連合 海洋地理研究部会 通信委員
 1994年－2001 東京地学協会 地学雑誌編集委員
 1995年－2002 日仏地理学会会長
 1995年－1999 東京地学協会 地学雑誌編集委員会 副委員長
 1995年－1997 東京地学協会 評議員
 1997年－1999 東京地学協会 理事、広報委員長
 1999年－2003 東京地学協会 理事、地学雑誌編集委員会 委員長
 2000年－2008 国際地理学連合 (IGU) 副会長 (地理教育担当、沿岸アジア・オセアニア担当)
 2001年－2003 東京地学協会 副会長 会館委員長
 2003年－2006 東京地学協会 監事
 2003年－2007 日本地理学会 評議員・代議員
 2004年－ Geografiska Annaler (Series B, Human Geography) Editorial Board
 2006年－2008 人文地理学会 協議員
 2008年－ Société de Géographie à Paris, Membre d'honneur
 2010年－ 東京地学協会 渉外委員

—業績目録—

原則として1997年に東京大学を定年となった以降の業績を挙げた。それ以前のは『東京大学教養学部人文地理学教室編；田邊裕先生の履歴と業績（1997年3月25日刊）』に収録されている。なお、それに脱漏していたもの、海外で引用されるなど重要と思われるもの、及び現在も自身がしばしば参照する業績は今回改めて採録した。数字は通し番号で、欠番は上記出版物を参照されたい。

(I) 論文

西暦 年 月

- 10) 71 3 地域構造の階層性と階級性（東大人文学科紀要；人文地理学III、pp 39-54）
- 13) 75 11 歴史学と地理学（歴史と地理 242号、pp 1-10）
- 15) 76 4 地域研究の意義（都市問題 67-4、pp 40-51）
- 16) 78 1 Problems of the New Towns in Japan (GeoJournal 2-1 pp 39-46) 西独
- 20) 80 6 La géographie japonaise et sa contribution possible (l'Espace géographique, 9-2, pp 95-104)

フランス

- 23) 83 3 Characteristics and Problems of Asian Port Cities (東大紀要；人文地理学Ⅷ, pp 19-41)
- 24) 84 1 Boundary Dispute between Municipalities – The Case of Ohmuta and Arao Cities on the Ariake Bay in Kyushu – (Geographical Review of Japan, Ser.B 57-1, pp 22-42)
- 26) 84 7 Boundary Dispute between Municipalities (Sbornik Praci 4,pp 51-66) チェコスロバキア
- 29) 87 11 Le centre-ville et la banlieu de Tokyo du point de vue de migration, (La qualité de la ville éd. par A.Berque; pp 177-186)
- 31) 88 2 Politique d'aménagement territorial aux Iles Okinawa, (Travaux et documents de géographie tropicale, No.61, "Géographie et Ecologie des Milieux Tropicaux", Centre d'Etudes de Géographie Tropicale, Bordeaux, pp.125-137) フランス
- 34) 90 6 Inhabitants and citizens of Tokyo (Geographical Review of Japan, Ser. B 63-1, pp 22-42)
- 36) 94 9 Les habitants de Tokyo et leur territoire, *La Maîtrise de la ville* (éd. par Berque, A.), l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences sociales, *Etudes Japonaises* 2, 377-392, Paris (mai 1994)
- 37) 94 9 Redéfinir la notion de citoyen, *ibidem* (éd. Berque, A.) (1994) 573-577, Paris (1994)
- 39) 97 12 大学における地理学教育の未来に向けて (地学雑誌106-6、pp767-771)
- 40) 98 3 東京における職業構造の地域変動 (労働と経済 97、労働・経済合併号、pp48-57)
- 41) 98 9 Le découpage administratif moderne des mura (communes) (INSEE méthode, No.76-77-78, "Les découpages du territoire", INSEE, Paris, pp45-56) フランス
- 42) 99 1 Le principe de découpage administratif de la montagne et le système urbain au Japon (Revue de Géographie alpine, pp.181-188, T. 87, No. 1, Grenoble) フランス
- 43) 99 12 多専門学術雑誌の必要性 (地学雑誌108-6、pp692-695)
- 44) 01 4 国際地理学連合と地理学 (三色旗 637、pp2-7)
- 45) 03 3 日本的対外直接投資動機及其変化研究 (北京大学学报、第40卷-2、pp121-128、李国平と共著)
- 46) 03 10 中国へ進出する日本企業の動機と地域選択およびその展望 (歴史と地理568号、pp25-40 李国平と共著)
- 47) 06 3 産業の高度化と人口 (産業の高度化、田辺裕編、日本産業構造リサーチセンター受託研究報告書、江崎雄治と共著、pp.1-18)
- 48) 07 3 年齢別に見た職業構造とその地域差 (産業の高度化その2、田辺裕編、日本産業構造リサーチセンター受託研究報告書、江崎雄治と共著、pp.33-42)
- 49) 07 3 Professionnalisation des industries et sur-urbanisation au Japon (産業の高度化その2、田辺裕編、日本産業構造リサーチセンター受託研究報告書、pp.209-215)
- 50) 08 3 観光産業の地域別動向と産業構造の変化 (産業としての観光とその現状把握、田辺裕編、日本産業構造リサーチセンター受託研究報告書、江崎雄治と共著、pp129-140)
- 51) 09 3 On the translation of Geopark (ジオパークの「地質公園」への誤訳) (観光産業の現状と問題点、田辺裕編、日本産業構造リサーチセンター受託研究報告書、pp.263-265)
- 52) 10 3 観光産業と観光地の現場 田辺裕編、日本産業構造リサーチセンター受託研究報告書)

(Ⅱ) 単行本

- 9) 85 7 歴史の舞台としての自然 (井上幸治編：民族の世界史8、「ヨーロッパ文明の原型」山川出

版社刊)

- 12) 93 11 Japon, Tokyo 他7項目 (Y.Lacoste編:「Dictionnaire de GEOPOLITIQUE」), Flammarion
- 13) 94 8 Japon, (Y.Lacoste 編:「Dictionnaire des ETATS」), Flammarion
- 14) 95 6 「現代日本の人口問題」、(共著) 総務庁統計局監修、日本統計協会
- 15) 96 9 「職業と人口—その地域構造と変動」、(編著) 大蔵省印刷局
- 16) 01 12 駒場の50年 1949-2000、(共著) 駒場50年史編集委員会、東京大学教養学部
- 17) 10 3 地名の発生と機能—日本海地名の研究 (共著、帝京大学地名研究会)

(Ⅲ) 報告書

- 10) 82 6 Physical Profile of Cities in the ESCAP Region (ESCAP, YOKOHAMA, HABITAT)、共著
- 13) 84 12 通勤・通学人口 (昭和55年国勢調査モノグラフシリーズ No.6、総務庁統計局刊)
- 14) 85 3 職業構造からみた人口 (昭和55年国勢調査モノグラフシリーズ No.5、総務庁統計局刊)
- 16) 85 3 市町村の境界設定に関する政治地理学的研究 (昭和59年度科学研究費補助金研究成果報告書)、共著
- 19) 90 3 都市分類 (昭和60年国勢調査モノグラフシリーズ No.6、総務庁統計局刊)
- 27) 00 3 日本における地理学の現状と21世紀への展望 (平成11年度科学研究費補助金基礎研究C、研究成果報告書) 共著
- 27) 01 3 日本における地理学の思潮と研究環境の改変に関する研究 (平成11-12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書)

(Ⅳ) 翻訳

- 1) 66 12 シャリエ:都市と農村 (クセジュ文庫、白水社刊) 共訳
- 6) 72 7 フェーヴル:大地と人類の進化 下巻 (岩波文庫、岩波書店刊)
- 12) 83 4 ル・ブルトン:言語の地理学 (クセジュ文庫、白水社刊) 共訳
- 14) 96 9 アメリカI (図説 世界の地理 1 朝倉書店刊) 校閲・共訳
ドイツ・オーストリア、西・中央・東アフリカ、中国、オセアニア (図説 世界の地理 12, 17, 20, 23 朝倉書店刊) 校閲
- 15) 97 2 ギリシャ・イタリア、北アフリカ、東南アジア (図説 世界の地理 11, 16, 21 朝倉書店刊) 校閲
- 16) 97 10 イベリア、(図説 世界の地理 10 朝倉書店刊) 校閲・共訳 アメリカII、南アメリカ、北ヨーロッパ (図説 世界の地理 2, 5, 6 朝倉書店刊) 校閲
- 17) 98 5 ベネルクス、ロシア・北ユーラシア、日本・朝鮮半島 (図説 世界の地理 9, 14, 22 朝倉書店刊) 校閲
- 18) 98 10 カナダ・北極、イギリス・アイルランド、南部アフリカ (図説 世界の地理 3, 7, 18 朝倉書店刊) 校閲
- 19) 98 10 世界地理大百科事典 第2巻 アフリカ (朝倉書店刊) 校閲
- 20) 99 1 世界地理大百科事典 第3巻 アメリカ (朝倉書店刊) 校閲
- 21) 99 5 中部アメリカ、南アジア (図説 世界の地理 4, 19 朝倉書店刊) 校閲
- 22) 99 5 フランス (図説 世界の地理 8 朝倉書店刊) 校閲・共訳
- 23) 00 1 東ヨーロッパ、西アジア (図説 13, 15 世界の地理 朝倉書店刊) 校閲

- 24) 00 1 総索引・用語解説 (図説 世界の地理 24 朝倉書店刊) 校閲・共訳
- 25) 00 1 世界地理大百科事典 第1巻 国際連合 (朝倉書店刊) 校閲
- 26) 00 9 世界地理大百科事典 第6巻 ヨーロッパ (朝倉書店刊) 校閲
- 27) 02 1 世界地理大百科事典 第4巻 アジア・オセアニアI (朝倉書店刊) 校閲
- 28) 02 3 世界地理大百科事典 第5巻 アジア・オセアニアII (朝倉書店刊) 校閲
- 29) 03 10 オックスフォード地理学事典 (朝倉書店刊) 監訳
- 30) 07 9 ベラン世界地理大系 第12巻 インド・南アジア (朝倉書店刊) 監訳
- 31) 08 2 ベラン世界地理大系 第7巻 東ヨーロッパ (朝倉書店刊) 監訳
- 32) 08 6 ベラン世界地理大系 第17巻 アメリカ (朝倉書店刊) 監訳
- 33) 09 7 ベラン世界地理大系 第18巻 カナダ (朝倉書店刊) 監訳

(V) 短報・書評

- 23) 92 4 パリの外国人 (1) (歴史と地理 第440号)
- 24) 92 7 パリの外国人 (2) (歴史と地理 第443号)
- 25) 92 12 国境の風景—ピレネーを歩いて (地理37 12月号)
- 26) 94 1 地中海式農業の特質 (歴史と地理 第461号)
- 27) 94 2 国境と集落 (住宅 43-2、日本住宅協会)
- 28) 95 1 オーギュスタン・ベルク教授のこと—通態論について (地理40-1)
- 29) 95 8 統計と調査—平成7年国勢調査に期待する (総務庁広報 MC VIEWS 第29号)
- 30) 95 11 民族概念のあいまいさ (歴史と地理 第482号、8-12)
- 31) 96 7 楽しい地理学を (歴史と地理 第491号、8-12)
- 32) 96 8 南極・北極—極地の自然環境と人間の営み (書評 地学雑誌105-4)
- 33) 96 11 メコン河 (書評 地学雑誌105-6)

(VI) 一般寄稿・随筆 (新聞・雑誌類)

- 19) 82 3 教養学科三十年の教育と研究 (座談会 東大教養学科紀要 14)
- 28) 91 10 地理学教室あんなに—国公立大学編5—東京大学理学部地理学教室、教養学部人文地理学教室 (地理 36巻10号、p81-85、古今書院)
- 30) 92 4 地方活性化に地理学者を利用した都市 (地理 37-4)
- 31) 92 7 パリ日本館から—国際交流の現場 (学術月報 45-7)
- 33) 93 10 パリ日本館館長奮戦記 (朝日新聞、24日文化欄)
- 35) 94 7 パリ国際大学都市のこと (学会会報 第804号)
- 36) 95 3 木内信蔵先生と山口岳志先生をしのぶ (人文科学科紀要 人文地理学 12、147-160)
- 39) 98 8 東京はいつ日本になったか (三田評論 No.1005 p. 63)
- 40) 99 4 おフランスの地理 (1) — (12) (地理 44-5) — (地理 45-4)
- 41) 01 4 国際地理学連合と地理学 (三色旗 637号)
- 42) 01 4 大学の改革と地理学 (歴史と地理 543、地理の研究 164号)
- 43) 01 12 特集号「地震災害を考える—予測と対策—」；まえがき (地学雑誌 110巻6号、pp769-770)
- 44) 04 12 送る言葉 (川崎昭典教授、逆瀬川潔教授、二村敏子教授) (帝京経済学研究 38巻1号)
- 45) 05 12 送る言葉 (今井勝郎教授、乗浩子教授) (帝京経済学研究 39巻1号)

- 46) 06 12 送る言葉 (降旗節雄教授) (帝京経済学研究 40巻1号)
 47) 07 10 国際地理オリンピックと地理教育 (歴史と地理 608、地理の研究 177号)
 48) 07 12 送る言葉 (柴川林也教授、飯田裕康教授) (帝京経済学研究 41巻1号)
 49) 08 12 送る言葉 (安保哲夫教授、岡田泰男教授) (帝京経済学研究 42巻1号)
 50) 08 9 ジオパークに望む事 (人文地理学の立場から) (地理 53-9)

(VII) 一般著述 (単行本)

- 18) 01 4 世界なんでも情報館 (ポプラ社、監修)
 19) 02 5 誇り高き辺境の古都レンヌ (朝日新聞社、世界100都市 (023))

(VIII) 教科書・テキスト

- 2) 78 3 -02まで改版 新しい社会 (中学社会科 地理・歴史・公民) 東京書籍刊
 3) 82 3 -現在まで改版 現代社会 (高校現代社会) 第一学習社
 4) 82 3 -02まで改版 現代の地理 (高校地理) 山川出版
 5) 83 3 -02まで改版 世界の地理 (高校地理) 山川出版
 6) 86 2 -現在まで改版 新訂現代社会 (高校現代社会) 第一学習社
 11) 01 3 学校放送「世界くらしの旅」テキスト NHK

(IX) 放送出演 (初演、*印はラジオ)

- 6) 78 11 Utilité de géographie (ORTF France Culturelle)*
 35) 96 7 西ヨーロッパ―自然と生活― CTS世界地理 (NHK)
 36) 03 1 パリ―都市の再生― 世界くらしの旅 (NHK)
 37) 06 10 教科書に載せたい新地理 (4Ch. 世界で一番聞きたい授業)

(X) 口頭発表および講演 (括弧内は要旨掲載誌)

- 26) 97 10 神奈川県教科研究会社会科部会総会 講演「ヨーロッパにおける境界」
 27) 97 12 ジャックカルチエセンターシンポジウム「領域区分」フランス (リヨン)
 Le découpage administratif moderne des mura (communes)
 28) 98 3 国土庁 国土フォーラム (パネルディスカッション)「ガーデンアイランズをめざして」
 30) 98 11 山岳と都市シンポジウム フランス (グルノーブル)
 Le principe de découpage administratif de la montagne et le systeme urbain au Japon
 31) 98 12 フランスでは日本をどのように教えるか (日仏会館諸学会シンポジウム)
 32) 00 8 29回国際地理学会議報告 韓国 (ソウル)
 Recent Trends of Geography Education under the Change of Social Needs
 33) 00 10 三田経済学会報告会 市町村境界はどう決まったか
 34) 01 10 L'évolution du programme d'étude universitaire de géographie au Japon en face de l'innovation technologique et de la décroissance rapide de la population (Saint Dié des Vosges, 国際地理学祭)
 35) 03 10 パネル 日本地理学研究の現状を見て (日本地理学会発表要旨集 64)

(その他;人物紹介)

- 1) 93. 4. 2. 朝日新聞 (国際地方版)「地球大通り」欄
 2) 95. 4. 21. 日本経済新聞 (東京地方版)
 3) 03. 1. 5-12号 Yomiuri Weekly (帝京大学ニュース欄)

帝京と私

田 邊 裕

(着任以前)

私をはじめ帝京大学と出会ったのは、1994年の秋、東京大学教養学部の川口評議員（後に大学評価学位授与機構理事）と浅島教授（後に東京大学副学長、学術会議副会長）から当時の沖永莊一総長との会食に誘われた時である。以来、半年に1度は、時には東大の、別の日には慶応義塾の元同僚と、時には一橋や筑波大学の先生方というグループとあちこちで会食をすることになった。総長に大学教育に関する質問を直接ぶつける先生もおられたが、概して先生方同士の会話を聞きながら総長自身は赤ワインをすすする静かな会だった。今のFaculty Development委員会のような研究会にも誘われた。しかし別に帝京大学に来てくれという話はなかった。定年までまだ2年半あった。

その年の暮れに、学寮で同室だった東大医学部の教授が、定年後、某地方医大と一緒にいかないかと誘ってくれた。彼は、同僚は全員医者で老後の面倒見は良いし、医学部教授の待遇は教養学部よりずっと良いというのだ。主な仕事は非常勤講師のリクルートで、医学部、いや大学でたった一人の人文社会科学系教授で授業負担も少ない、下の助教授は語学全般を見る責任者だという。秘書も付くよと美味しい話だったが、これは彼自身が別の病院長に招かれて消えた。

翌年、某旧帝国大学からもお誘いがあった。これはいわゆる教養部を大学院に改組するため、東大との併任を希望していた。教養部長ご自身からのお話だったが、そちらの大学の定年が63歳で在任期間が短かすぎるから、東大との併任を58歳から2年間欲しいとなり、最終段階になって話は流れた。大学院には5年在任しないと、最初の博士卒業生を出せないからである。地理学の分野では、2帝大の併任教授は湯川秀樹先生のお父様以来の話で、少々残念ではあったが、東大でも改組の真最中で、わがままは出来なかった。引き続いて旧友経由で九州や四国の大学から招聘の話が舞い込んだ。飛行機代も出るし、2泊3日で講義さえしてくれば教授会も出なくてよいということであった。なかなか踏ん切りが付かない所に、1996年2月、別の旧帝大から併任ではなく定年後に転任で来てほしいと連絡を受けた。3月には確定的な返事をするようになった。その提案を受けるには、転居か新幹線通勤しかなかったが。まさにその翌日、助手時代から懇意にしていた慶応義塾大学の友人から、三田の経済学部に来てくれとの電話を受けた。こちらは駒場よりさらに短時間通勤が可能であったし、定年も65歳と旧帝大より2年遅かったので、二つ返事で承諾した。

ただちにお誘いを受けた諸大学にお断りをした。行きかかっていた旧帝大からは半年後の10月まで待つので、その間に決心が変わったら必ず知らせてほしいとのことであった。丁度その折に、帝京大学の沖永総長との会食があったので、早速慶応義塾への内定をお伝えした。まだ来てくれと言われていなかったの、報告となったのである。即座に、慶応の定年は65歳だから、その後は帝京に来てほしいと、人事や生臭い話を一切されていなかった総長が応じてくださった。他大学からのお誘いは、その後某公立大学の学長に来てくれという話が持ち込まれた。大規模な合併と改組を控えて、1年間は在京のまま17人もの教員のリクルートをして来て欲しいというのであった。それもまた魅力的で

あったが、東大の1年あとに定年となるその県出身の友人を紹介した。任地が遠くて転居は必須であり、定年を前に1年を切っていて、急に心の切り替えをできなかったし、すでに慶応義塾の飯田経済学部長に昼食に招かれてお話を聞いており、心は慶応に移っていたのである。飯田先生とは、その後帝京大学へ一緒に赴任する事となった。

(着任後)

1997年に東大を定年になると、私は突然駒場でご同僚だった平成帝京大学の福井先生（フランス語）と一緒に帝京大学国際センター副所長（非常勤）とされ、同時に一般教養（総合基礎）科目の講義で週1日八王子校舎に出向いた。5年後に着任を約束したのだから、帝京の現状を非常勤の目で見て欲しいというのであった。また東大で入試委員長をやっていたのだから、帝京大学の入試制度に関して第三者の目で現状を見てレポートして欲しいとも言われた。まだ慶応義塾の在任中であつたが、板橋や千葉の入試の現場を拝見し、何人かの出題責任者にインタビューし、採点現場で採点委員や出題委員のご意見も聞いた。また赴任の前年には、総長から直々に着任希望の学部学科があるかと聞かれた。私は東大時代には文系の人文科学科長、理学系研究科の地理学専攻主任や広域科学科長、慶応時代には経済学部教授だったから、文学部でも理工学部でも経済学部でも結構です。お任せしますと答えた。文学部史学科はちょうど先輩の斉藤学科長が定年になるころだったが、東大時代に私の教室の助手だった滝沢先生が文部省から転出しても良いとのことで、私自身は結局経済学部に着任した。

2002年4月の辞令交付時には、グラスゴーの国際地理学連合役員会で海外出張していたが、帰国して見たら経済学科長に任じられていた。柴川学部長と小島教務委員長がしっかりフォローしてくれていたのので、その後も度重なる海外出張はなんとかこなすことが出来た。総長が学長職を現学長に譲られて学主となった後も、会食はたびたびあって、2年後には学部長、研究科長を命ぜられた。あの数年にわたる会食はいわば私への面接試験だったのかもしれない。また入試制度が先に提出したレポートのごとく改組され、言い出しっぺだからとそのまま委員長にされた。そのレポートをきっかけに学主には、多岐にわたる内容の手紙を送ることとなり、やがて、学長にもお送りするようになった。さまざまな意見、感想などまだ結論に達していない提案の原案まで、自由に書いた。気分的には上司に出す手紙と言うよりは、友人に送る私信のようなものであった。時にはコピーがそのまま事務局にまわされて、総長からの指示となったので、こちらは何か虎の威を借る狐のようで事務局の皆さんには申し訳なかった。対応された職員の方々には、あらためて感謝したい。

学部長になって、有能な河野教務委員長以下の教務委員会メンバーや各種委員会に助けられて1年を経たころ、経済学部で観光経営学科を作るから原案を用意せよと下命を受けた。幸い法学部に観光コースがあって、そちらから石井、向山教授を配転して下さったので、カリキュラムや人事案の準備が進んだ。観光経営学科は2006年に発足となったが、入試での英語必須、ゼミの2年間連続履修など他学科と異なるシステムをそのまま認めて下さった。この時も言い出しっぺだから学科長を併任せよとのことだったが、すでに学部長、経済学科長、研究科長、経済学専攻主任と併任しており、5つ目はさすがに厳しいので1年だけと約束していただいた。

翌年2007年3月は帝京大学における定年の年であつたが、2月になって、新設学科の場合には最初の卒業生が卒業するまで、あと3年間は在任せねばならないと言われた。しかし3月末になって、約束通りふたつの学科長と専攻主任との3役職の併任を解くから、国交流委員長、TSAC（帝京大学スタディアブロードセンター）長と日本語予備教育課程の科長とを併任せよと申し付けられた。

この併任が、帝京大学における多忙の極機をもたらした。幸い国際地理学連合の副会長は8年の任期

をおえたが、国際交流のための親善訪問の往来や海外入試など各種行事で相変わらず海外出張が多く、その休講に対する補講が土曜日の過半を埋めることとなり、規定では週3日プラス会議に登校日であったが、週6日登校せねばならないこともしばしばであった。学部長や学科長は各種委員が補佐してくれたが、国際交流関係は自身が判断し、捺印し、出席せねばならない会合が多かった。日本語予備教育課程では3名いた専任講師が1名は海外留学で、1名は辞職でたった一人となり、その補充に苦勞した。人事は難しい事を痛感させられた。

(学主の逝去と定年)

2007年6月、学主、学長ご夫妻、事務局が連れ立って韓国の水原大学に視察旅行をした。2泊3日のあわただしい旅行ではあったが、私は早起きの学主と朝食を二人で執り、3台に分乗するので移動時は常に学主の車に同乗したので、さまざまな会話が交わされた。理由は分からなかったが、健康に関するご注意が多かった。検診をしっかり受ける事、何かあったら必ず学主に連絡する事、足腰を鍛える事などなど私の健康を思って下さっている事を感じた。まさか帰国直後に、その学主ご自身が病魔に冒されていると知らされるとは夢にも思わなかった。

最後にお会いしたのは翌2008年5月16日である。文学部史学科の地理コースを認知させるために、史学地理学科と改称するか、経済学部観光経営学科に移管して観光経営と観光地理との2コース制にするか、よい方法はないかとの相談であった。今のままでは地理を勉強できるということが受験生に周知されていないので、何とかしたいという点では意見が一致したが、あとは学長と相談するようとの結論となった。この件は本部事務が調査されたようで、そのまま沙汰やみとなってしまったのは残念である。しかし今回、宇都宮キャンパスに地域経済学科が新設されることになった。これは学主に申し上げた応用地理学の重要な側面を含んでいるので、あながち見当はずれにはなっていない。

学主先生はその年の秋に逝去された。たまたま8月にサハラ砂漠から電話でお話しをすることができた。お元氣な声だったので、それが最後になるとは思わず、同窓会の組織化、名誉教授制度の改正、地域経済学科の新設などに関して主題だけを挙げて、帰国したらぜひお話ししたいと申し上げた。しかしそれはかなわなかった。学主先生のご逝去で、私自身の帝京での仕事は一応終わったのかなと感じた。学主先生は毀誉褒貶さまざまに取りざたされてきた。しかし、私には上司としてではなく、常に友人のように接して下さった。それは学部長になるまで9年も食事をしたり、よもやま話しをしたりした期間が長かったからかもしれない。私としては、定年まで全力投球して、最善のスタッフを学長先生に残して行く事が使命かなと考えた。先生が亡くなった後の1年半は、さまざまな面で、とりわけ人事の面で、ややこしい事が続いた。任期中ばで退職すべきではないかとか、いや学長に御願ひして、1～2年定年後も大学に残って処理すべきではないかとか、悩みが無かったと言えば嘘になる。

しかし学主が亡くなってから、学主自身が気遣ってくれていた健康が第一であるとの思いが強くなった。1999年の最初の手術以来2009年夏の腎臓癌の手術まで、あれこれ入院が4回、目下再燃はないが、2010年は大腸ポリープの入院手術を控えている。頼まれている原稿執筆ならば自分で時間配分を出来るので、不定期の会議には出席出来る。国際地理学連合の副会長時代に決定に参画した国際会議、本や雑誌の編集会議、各種学会への出席、同窓会、展覧会、音楽会に出かけるなど、加齢性脳機能不全症になるまでは、もう少し予後の生活を楽しむ事にした。

あとは学主先生のみ靈に感謝し、帝京大学のさらなる発展を祈るのみである。

